

マラヤ¹における日本占領の記憶 —Tan Twan Eng が描く戦争と人間の絆

河原崎やす子

Memories of Japanese Occupation in Malaya — Considering war and human bond depicted by Tan Twan Eng

KAWARASAKI, Yasuko

アジアにおける日本の植民地支配の記憶

日本とアジアの関係において、戦後75年になろうとする今なお日本が太平洋戦争で残した遺恨がアジア各地でくすぶっていることが明らかである。その一端は現在の日韓関係の悪化に示されている。慰安婦問題と徴用工問題は日本ではすでに政治的に解決済みとされているが、一方の当事国の韓国にとってはそうではなく政治問題となっており、前政権もその対応を誤ったとして批判された。このような今なお問題となる戦争の負の遺産が、アジアの他の地域にも多く残っている。筆者はこういった状況を踏まえ、被害側の戦争記憶を文学表象からたどり分析することに意味と意義を見出し、ここ10余年にわたり文学に描かれた日本植民の記憶をアジア系アメリカ文学ジャンルから取り上げ分析してきた。そして戦争体験を持たない世代の作家が日本植民の記憶を文学に取り上げている近年の現象に注目し、これをひとつの大きな潮流だと指摘した²。この潮流が明らかにしているのは、移民作家たちによる出身国における過去の戦争の記憶を継承しようとする意図である。筆者がこれまでに取り上げたのは、中国、韓国、フィリピン、グアム、シンガポール、ハワイなどをルーツに持つ移民2世か3世のアメリカ人作家である。日本は彼らの出身国を太平洋戦争で占領し植民統治をして多くの人的、物理的、精神的被害を与えたのであり、その記憶を彼らは文学に表しているのである。この一連の研究において認識できたのは、アジアにおける日本植民統治に対する被害側の厳しい視線である。作家たちの表象の形態は直接的非難から間接的で婉曲的な告発までさまざまであるが、実体験を持たない作家たちは史実を掘り起こしその歴史を記憶として表現しようとしている。ほとんど忘れられた歴史やもう触れられたくない歴史を再構築するという、いわば記憶の呼び起こしは、書き手の作家にとっては未知の領域として魅力ある文学テーマとさえなっている。問題のひとつは、こういった文学が日本にほとんど知られていないことである。だがグローバル時代において、日本人はより視野を広げこういった潮流に敏感になる必要があると思われる。その意味で筆者のこれまでの研究にはいまひとつの意義があったと考える。

ただここまで研究を続けてきて、筆者はその対象とする文学領域をより広げるべきではないかと考えるに至った。これまではアメリカ文学研究者として、対象とする日本の植民統治に関する作品をアジア系アメリカ人作家に限ったが、アジアで発信されている作品に目を向けると視野が広がり、日本植民に対するまた別角度の見解に触れることができると考えられるからである。これは研究の対象をアジアとアメリカの2国間関係から、アジアと日本の2国間関係に移すという転換になる。だがたとえ研究の方向性をこのように変えても、あくまでも今までの研究の蓄積

の延長上に置く研究とするために、今まで同様アメリカ、アジア、日本という3地点を見据えた研究となる。そしてこの研究には以下の二つの文学の枠組みが有機的に作用すると思われる。まず、これは研究の枠組みとしての環太平洋の思考を持続しさらに強化するものである³。環太平洋研究の基本理念とは、欧米および日本の環太平洋地域の支配や侵略がアジアの文学表現におけるコロニアリズムとポストコロニアリズムにどう影響したのかを思考することで、この地域の横断的な文学分析を可能とすることである。つまり、日本の植民統治が文学に如何に表現されているかという課題を環太平洋という地域枠組みから考察することで、共通の意識や想像力および表現傾向などを見出せるわけであり、これは今までの研究にも生かしてきた。二つ目は世界文学という思考である⁴。Wai Chee Dimock は、グローバル時代においては単一の国家中心を脱して世界文学という文学研究の枠組みが必要だと提唱する。これは、アジアをはじめ他の地域からのアメリカ移民の文学がその出身国の文学と横断的に研究されるようになったことをふまえて、アメリカ文学は世界文学となって論じられるべきだとするものだ。アジア系アメリカ文学はまさにそれに当てはまり、アジア地域の英語文学も世界文学という枠組みならば論に加えることが可能となるわけである。

以上の考え方にもとづき、本論ではアジア系アメリカ人作家ではなく、アジアで発表された日本植民を取り上げた作品に目を向けることとする。ただし言語的には英語で表わされた文学となるため、マレーシアやフィリピンなどの作家が候補として浮上する。その中からこれまで取り上げてこなかった注目すべき作家の一人、マレーシアのタン・トワンエン (Tan Twan Eng) に焦点を当て、その語りからマレーシアにおける日本占領の記憶を読み解きたい。マレーシアは戦前には英領マラヤとされた場所であるが、まずは日本侵略に関する歴史経緯をたどり、そこから作品がどのようにその歴史を文学に表象しているか分析する。

マラヤ戦の歴史経緯

日本軍のマラヤ占領は2国間の戦争ではなく、太平洋戦争という枠組みから俯瞰すべきである。戦争の発端は、米国が満州事変や韓国合併など日本によるアジアの国への侵略と植民に対抗して、1941年8月に対日石油全面禁輸を実行し英国もそれに続いたことにある。資源を断たれた日本は軍事資源獲得という目的で東南アジア占領に舵を切るが、もうひとつ理由として植民化されたアジアの解放と大東亜共栄圏設立という目的も掲げた。しかしあくまでも資源戦争が最重要課題で、後者は後付けされた目的に過ぎないとされるが、後者も重要だったという見解も少なくない。いずれにせよ、日本は太平洋の各地域をほぼ同時に侵攻して広範囲の地域を占領したのである。

1941年12月8日の真珠湾攻撃の1時間20分前、日本軍はマレー半島コタバルの英国陸軍および海軍に奇襲攻撃をし、東南アジアでの戦争を開始した。これは東南アジアのほぼ全域にわたる侵略の始まりであり、日本軍はベトナム、ラオス、カンボジア、インドネシアなどを次々に占領したのである。マレー半島においては、日本軍は英国領マラヤの東岸コタバルに上陸して英国軍の航空基地3か所を制覇し、マレー半島の制空権を手にし



シンガポール侵略地図⁵

た。その後マレー半島を南下し、当時大英帝国の東アジア最大の軍事拠点であったシンガポールを攻略して1942年2月の1週間で征服し、軍事植民地とした。また同時期に、フィリピン、ビルマ（現ミャンマー）そしてインドネシアも次々と制圧し占領したのである。この後日本陸軍によるマラヤ占領はほぼ3年半に亘るが、抗日ゲリラ活動もその間ずっと続く。1944年11月に連合国はマラヤ爆撃を開始し、ゲリラや共産主義者の活動も激化する。そして1945年8月に日本は降伏し、9月初めには英軍が到着してこの地を再占領し、その時点で日本占領が終わったとされる。

マラヤは多民族から成る国家であった。最も多い華人は政治経済の中枢を担っていたが、イギリス系を中心とするユーラシア人が支配階級で、マレー人とインド人は労働者階級の庶民という住み分けがされていた。日本の植民統治は、中国本国への経済支援をしていることを理由に華人に対する厳しい処罰を伴うものであり、ジョホール・バルの王宮西側の広場における華人大虐殺やシンガポールにおける大粛清など残虐行為が占領期に行われた。終戦後、現地において戦犯の処刑と処罰が下されたが、詳細な調査もされず被害の全貌は明らかにされなかった。また多くの住民が何らかの形で日本に協力していたために、密通者の告発も厳しいものではなかった。ことに華人粛清に関する日本側責任者は明瞭にならず、十分納得できる厳罰も科せられなかった。これに対する不満や批判は残り、たとえばマレーシア建国の父であるリー・クアンユーは、回顧録で過去の戦争の残虐行為に対する日本の向き合い方をドイツと比較して、厳しく糾弾している⁶。日本の戦後賠償は当初新たな植民宗主国となった英国に大部分が回り、最終的な計画遂行は冷戦期に米国主導で終了とされ、マレーシアには充分行き渡らなかったという結末にも問題は残る。

日本の占領下で起きたことに関して、マレーシアではほとんど知られず研究もされてこなかったが⁷、戦後75年近くを経た現在ようやく戦争の記憶が様々な形で発表され、文学分野でも出版されている⁸。これは戦争の記憶が決して消えずに継承されていることを示すものにほかならない。アメリカに移住したアジア系と同じく、アジアにおけるアジア人もまた、自国に何が起きたのかを知り、それをどう捉えるかという課題に向き合っているのである。それはまた、経済的に安定して初めて可能となった自国のアイデンティティを探り、あるいは確認する行為なのだといえる。

タン・トワンエンとマレーシア

本論で取り上げるマレーシア人作家のタン・トワンエンは日本には知られていないが⁹、上記のような意識を持つマレーシア人の作家である。インタビューによると、1972年にペナンに生まれクアラルンプールで育った中国系マレーシア人だ¹⁰。いわゆる海峡華人 (Straits Chinese) というのが自ら認める出自であり、家庭では英語を主体としつつも中国語をも話す環境だったという。ロンドン大学で法律を学びクアラルンプールの法律事務所働いたのち、南ア共和国のケープタウン大学で修士課程に学んでいるときに、第1作の *The Gift of Rain* を発表した。これは2007年に出版されて同年のブッカー賞最終候補となっている。2012年発表の第2作 *The Garden of Evening Mists* もブッカー賞の候補となり、結局この作品はブッカー賞のアジア版 Man Asian Literary Prize および Walter Scott Literary Prize を受賞した。タン¹¹ は現在マレーシアに居住し、さまざまところでの講演活動とともに次作に取り掛かっているということである。

彼はマレーシアにおいて初めて歴史小説を書いた作家とされるが、歴史への関心はかなり早い時期に生じたという。子ども時代から大量に読書をした結果、当然のように創作の道へ進む

が、同時に歴史への興味も沸きマラヤの歴史資料を収集した。そして周囲が日本占領の歴史に無知で無関心なことを知って、それは不当だとして歴史小説に着手したのである。タンはマレーシアとくに生まれ故郷のペナンを慈しみ、ペナンを主人公に小説執筆をしようと考えたほどだという。その故郷を離れケープタウンにいた時に、ペナンを恋しく思いそれをも伝えようと『雨の恵み』を執筆したのである。その執筆動機には、マラヤの屈辱の歴史が正当な謝罪なしに忘れ去られていることに対する異議申し立ても当然あるわけだ¹²。

The Gift of Rain 『雨の恵み』概要

タンの初作品『雨の恵み』は、既述のようにブッカー賞候補となった骨太の本格的歴史小説である。テーマや語りはオーソドックスで、際立った新機軸の技巧などは用いてない。しかし戦争という大変重いテーマを多角的で斬新な視点で取り上げており、新たな境地として高く評価された。タン自身はカズオ・イシグロから大きな影響を受けたと述べているが、まさにイシグロに通じるような抑揚を抑えた巧みな語りが全編に広がる。登場人物は大部分フィクションであるが、一部山下将軍などの史実に基づいた人物が登場する。まずは物語の概要を追ってポイントを押さえ、次に個別の分析を試みたい。主眼点はあくまでも日本の侵略統治の表象にある。

500ページを超える大著は2部に分かれており、Book Oneはマラヤにおける戦争開始までの戦争前夜を、Book Twoは日本侵略から日本の敗戦までを、マレーシア人の主人公フィリップ・ハットン(Philip Hutton)の1人称語りでたどる。時間はおよそ50年間をカバーしており、舞台はマレー半島西部のペナン島である。物語の発端は、第二次世界大戦終結の50年後に70代となったフィリップを年配の日本人女性ミチコ(Michiko Murakami)が訪れるシーンである。ミチコはかつてフィリップが深い絆で結ばれた日本人エンドウさん(Hayato Endo)¹³の元恋人で、エンドウさんの50年前の消息を求めてペナンを訪れる。それに応じてフィリップが自分とエンドウさんとの交流を中心とした戦争体験を語るというのが、本作品の枠組みである。全体はマレーシアにおける日本の侵略と占領の話だが、そこに展開されるのは被害と加害が複雑に入り組む愛憎と裏切りの人間模様だ。たとえば、日本から来た加害側のミチコが原爆症を病んでいていわば戦争の被害者でもあるという設定ひとつ取り上げても、戦争のもたらす複層的な惨禍を描こうとする作家の意図が明らかである。

語り手フィリップとエンドウさんは物語の中心人物で、ふたりの交情が戦争という渦に巻き込まれる状況が核心に置かれている。フィリップは話の発端の1939年当時16歳、ペナンを代表するコンツェルンのHutton & Sonsの御曹司だが、純英国系の兄妹とは違い母が中国系という混血で英国系の周囲との違和感を常に抱いている。一方、エンドウさんは日本で父親が反政府運動で投獄され、その身の保証と交換条件でマラヤの日本軍に送り込まれた武術家だ。ただし、フィリップにその正体がわかるのはずっと後である。エンドウさんはフィリップの父から住居を借りた縁でフィリップと知り合い交流を深める。二人を結ぶのは合気道で、エンドウさんは33歳年下のフィリップに武術とその精神、さらには日本語を徹底的に教えこみ、フィリップはいずれにも熟達していく。二人のつながりは、強い師弟関係から疑似親子関係、さらには同性愛関係へと発展する¹⁴。ただしその始まりから平等な関係ではなく、エンドウさんは自らの任務を隠蔽して全面的に自分に信頼を寄せるフィリップを利用しており、それは後日フィリップを愕然とさせる。フィリップはエンドウさんを通じて日本軍に関する若干の情報を入手出来、日本領事からは多言語能力を見込まれて日本軍で働くことを持ち掛けられる。1941年という戦争直前の慌ただ

しい空気がこの二人にも迫る。こうして物語前半は、戦争の前触れを背景にエンドウさんとフィリップの絆の構築が主となっている。

後半の Book Two は 1941 年 12 月の日本軍の侵略開始と翌年 2 月からのマラヤ占領を扱い注目すべき部分であるが、2 人の関係も二転三転する。日本軍の勝利はマレーシア半島北部から熱帯雨林を通して自転車で南下するという戦略によるが、それはフィリップがエンドウさんに示唆した道程であるため、エンドウさんの正体を知った彼は不信感を抱くが、なおも彼を敬愛し続ける。フィリップは敵側の人間エンドウさんとの関係が父や同胞を裏切っていると感じ苦悩するが、最後には自分たちを守るためとして日本軍に協力することを決意する。‘I’ll be working for the Japanese government the day they take over.’ (331) という息子の言葉に、父は ‘Then that is what Mr. Endo has taught you to be. That is what he made of you. … So you have betrayed all of us, all the people of Penang.’ (331、省略と下線筆者、以下同) と絶望して言い放つ。こうして裏切者とされたフィリップは、1942 年 2 月の占領時から日本軍の通訳になり同胞から有形無形の攻撃を受けるが、それは彼の解釈では家族と会社の安全と引き換えの代償なのだ。‘Your family will be safe’ (337) というエンドウさんの言葉通り、家族は安全を保証されるがそれを全く知らずにフィリップを拒絶する。孤立した状況で占領からおよそ 3 年経った頃、フィリップは 30 人の中国系住民の虐殺という事件に直面する。手出しできない状況は彼を激怒させ日本軍への裏切りを決意させて、友人のゲリラであるコン (Kon) に情報を与えて日本軍の基地破壊に手を貸し行動を共にする。その後英国軍が猛攻を開始し日本の敗色が濃くなる中、フィリップは日本軍に捕まり反逆罪で処刑寸前となるが、副領事のエンドウさんは彼でなく彼の父を長光の刀で斬って処刑する。これは父とエンドウさんの裏取り引きでありフィリップを悲嘆させるが、その直後に戦争は終結して彼らの立場は逆転し、エンドウさんは英国軍に捕われ戦争裁判で終身刑となる。ところがエンドウさんは脱走してフィリップのもとに逃げ込み、無言の合意の上でフィリップは長光で彼の首を斬り落とす。こうしてフィリップは預言の通りに ‘You’re the one who will bring us all to an end.’ となり、たった一人の生き残りとして戦争の話語るわけである。この後半部分はいささか活劇調となっているが、日本占領の詳細はその中に巧みに織り込まれている。日本軍人の残酷性はもちろんだが、それと対照的な芸術性や精神性、そして彼らの多様性も描きこまれている。エンドウさんは残酷な日本軍人の対極に置かれているが、合気道の達人であり精神性を重んじるが最終的にはフィリップの父を斬首し、自らは刑に服することなく逃れて自死に近い死を選択する、という結末は、作者による日本の美学の解釈であろう。

戦争はフィリップの人生に決定的な爪痕を残したが、彼自身は「雨の恵み」をもって生まれたのだとされる。‘You were born with the gift of rain. Your life will be abundant with wealth and success. But life will test you greatly. Remember – the rain also brings the flood.’ (69) 雨は恵みともなり洪水ともなるというこの占いの預言は深い意味を持つ。洪水とは戦争であり、それも彼の一生を激変させた洪水なのだ。雨は様々なシーンで効果的に使われているが、最終場面でフィリップは雨を自らの人生と絡めて総括している。

Like the rain, I had brought tragedy into many people’s lives but, more often than not, rain also brings relief, clarity, and renewal. It washes away our pain and prepares us for another day, and even another life … the rains follow me and give me comfort … (507)

フィリップは雨が自分につらさとともに希望や安らぎももたらしたと認識するのだ。雨がすべてを流し去るというのは常套句ではあるが、この悲惨な戦争体験に対抗する恵みと希望が生まれる

という意味が加えられ、それがタイトルとされているわけである。

本作品には多くの戦争関連のメッセージがあるが、いくつかの項目に分けて以下に分析し作品の全体像に迫りたい。

戦争と国民アイデンティティ

日本の占領統治にはマレーシアという国の複雑な民族性が絡まっているが、それは英国植民の時代から始まったといえる。英国支配の政治経済政策のもとで民族の分断が続き、支配階級の英国人とある程度の政治参加を認められたマレー人、経済力を持つ中国寄りの華人に加えて契約労働のインド人などの集団がおり、ユーラシア、中華、マレー、インドの4民族は住む場所や職業も民族で分かれていた。フィリップは父や兄姉のような純粋英国系ではなく、母のような華人でもなく混血であり、アイデンティティに関してはずっと混迷を感じ、それが日本軍に協力するという戦中の身の処し方に大きく関わっている。恵まれた育ちにもかかわらず帰属意識を持ってないという主人公のこうした悩みは現代人に共通するものとして、共感を生み出す効果があるといえる。

自国が占領されたときに、若い被征服者はどう身を処すのだろうか。間違いなく国民アイデンティティがその行方を左右すると思われるが、作中には二つの道が示される。一つは純血の血統を持つ人間の選択で、敵の日本軍との対決である。これが中国系のコン(Kon Yeap)というフィリップの唯一の親友の選択だ。コンは華人に対する日本軍の弾圧と虐殺への怒りと強い愛国心から対日ゲリラに身を投ずる。これは確固とした国民アイデンティティを持つがゆえの選択である。一方、混迷するアイデンティティの持ち主のフィリップも、当然のように友のコンに同道を求められる。しかし彼はあえてもう一つの選択をするのだ。それが日本軍の内部に身を置き内通者(watchdog)になることだ。これはマラヤのいずれの民族にとっても裏切り行為なのだが、フィリップは自分の家族とその事業を守るための究極の手段だと考える。敵である日本軍のために働くことは、彼の理解では祖国への裏切りとはならず、家族を、ひいては祖国を救う唯一の道と思えるのだ。これはじつは多くのマラヤの人も信じて取った行動でもある。愛国心や祖国の救済という点では、コンに負けず熱い思いはあるものの、結果は正反対の選択をするわけである。だが彼はこの考えが浅はかであったことにすぐ気づき、離脱を希望するがそれは拒絶される。残虐で容赦ない日本軍は彼の父への深い愛に目を付け、父の安全を交換条件として徹底的にフィリップを利用する。エンドウさんはマラヤ占領日本軍の副領事として、可能な限りフィリップを支援するが自らの立場を逸脱することはできない。フィリップは国を裏切る結果になった自分の行為を悔い、コンの愛国行為を心から羨望する。恵まれたバックグラウンドをすべて投げ打ち抵抗運動に身を投じたコンの行動を可能にしたのは強固な国民アイデンティティであり、フィリップの一貫しない不安定な行為を生み出したのは国民アイデンティティのゆらぎにほかならない。最終的にフィリップは強力な愛国心を感じて日本軍からゲリラへと身を転じ、裏切りの裏切りをするが、その時には国民アイデンティティはもう揺らがずに確固たるものになっているわけだ。戦時という非常事態において、国民アイデンティティは試練にさらされ、取るべき行動を左右することがここに示されているのである。

信頼と裏切り

信頼と裏切りは、本作品の中核に置かれている極めて重要な項目であり、テーマであるともい

える。当初フィリップは家族から孤立し友もなく孤独だが、二人の人間ときわめて強い絆を持つことになる。それがエンドウさんとコンだ。エンドウさんとはいわば垂直の師弟関係、コンとは水平の友人関係である。この絆を通じて示されるのは、敵味方といった単純な二項対立の拒絶であり、複雑な人間の感情の交流である。作者タンは信頼を築いた人間関係に戦争が介入することで起きる裏切りという状況を展開させて、これを示している。

フィリップはエンドウさんと師弟関係に基づく信頼と愛、しかも疑似親子そして同性愛という特別の絆を持つ。ところがこの二人の信頼と裏切りの関係は複雑な形で示される。まずは、裏切りという項目を考えると、エンドウさんはその関係の始まりからフィリップとの信頼関係を裏切る行為、すなわちフィリップの情報を日本軍のために密かに利用をしている。つまり信頼と裏切りが同時に存在しているわけだ。そもそもエンドウさんがマラヤの日本軍のために働いているのは、父親を人質に取られやむなく自らの平和主義に背いて任務を受けたという経緯によるが、これも自分の信念への裏切り行為だといえる。そしてこれは、戦争後期におけるフィリップの選択と類似した行為なのだ。フィリップもまた、父を守るためにマラヤの人民への裏切り行為となる日本軍の通訳を続けるからである。いずれのケースも父という肉親への愛が裏切り行為に関与していることになる。次に、裏切りの裏切りというより複雑な行為に目を向ける。エンドウさんは日本側に与する立場であるのに、フィリップに重要な機密情報を流しており、その行為は明らかに彼の祖国日本への裏切りで、いわば裏切りの裏切りといえる。それと類似の行動をフィリップも取る。彼は日本軍の通訳として得た情報を、悩みつつもゲリラのコンに伝え自らもゲリラに同行する。これも裏切りの裏切りである。この二人の類似行動によって示されるのは、フィリップとエンドウさんの発想と悩みの共通性である。彼らは自らの信条に背く行為は結局できないのだ。エンドウさんがフィリップに教える愛と調和という合気道の理念は、二人が共有する理念となっている。だからこそ、二人はうらみや後悔を越えて最終的には絆を取り戻し、本当の意味で信頼しあって最期の時を迎えるのである。作者タンは、この二人に戦争に巻き込まれた人間の真摯な生との向き合いのかたちを提示しているのではないだろうか。

さらにコンに関しても信頼と裏切りのパターンがみられる。コンはフィリップ同様、富豪の家に生まれた何不自由ない御曹司で、フィリップとの共通性を持たされている。それがフィリップ同様、田中という日本人武術家から合気道を習得しその理念に通じているという設定だ。だがコンはフィリップとは違い、ゲリラの信条に共鳴して抗日組織へ身を投ずる。ところが組織は内部に激しい意見の対立とリーダーの独裁という問題を抱えており、調和と愛からは程遠い。これを知ったコンは絶望してそこから離脱しようとするが、それは組織にとっては裏切り行為とみなされ殺害されるのだ。こうして敵との闘争を何よりも優先すべきゲリラ運動においても信頼と裏切りのパターンが展開されている。結局、戦争はフィリップ、エンドウ、コンを裏切り行為に追い込み、それは彼らの命にかかわることにまでなる。戦争という非情な事態はこのような想像を絶する苦境を展開させるとここに示されている。

日本文化の意味

様々な形の日本文化が作中で重要な意味付けをされているが、中でも大きな意味を持つのが合気道、日本刀、俳句である。これらは巧みに戦争と絡めてあり、象徴的な効果を上げている。合気道と日本刀はともに「闘う」という意味を付与されているが、その意味合いは異なる。エンドウさんは合気道の達人で、創始者の植芝盛平¹⁵の直弟子とされており、合気道の神髄は闘

いそのものではなく、愛と調和という精神性にあるとしている。つまり合気道は戦争の対極にあり、戦争と対比的に用いられているのである。フィリップはその位置づけを徐々に習得していくが、それでも次のような疑問を発する。‘If a higher level of *bujutsu* involves fighting with the mind, what then is the very highest level?’ (181) すぐれた武術は心で闘うことになるならば、もっともすぐれた闘いとはどのようなものなのか、という疑問に対して、エンドウさんの ‘That would be never to fight at all.’ (181) まったく闘わないことだ、という答えは、合気道有段者である作者タンが示す合気道の理念でもある。エンドウさんはフィリップが合気道に熟達した時、名刀長光 (Nagamitsu) 大小のうち「雲」と銘のある刀を与え、自らは「光」と刻印がある太刀を手元に置くが、いずれも作品中で大きな役割を持つものとなる。フィリップはこの刀を受け取った時に与えられた重みを悟り、そこで二人の間にはより高度で知的な精神的交流が生じる。

そしてこの刀の意味は、戦争末期に3人の主要人物を斬首するのに使われることで明らかになる。3人とは、フィリップの敬愛する父、それからコンの師でエンドウさんの同輩の田中、最後はエンドウさんその人だ。いずれも終戦直前の窮地に陥った日本軍が関わる中で起こる惨劇である。フィリップの父を斬るのはエンドウさんで、父が処刑寸前の息子の身代わりに自分の身を差し出すのである。田中の斬首は、コンとフィリップの3人でゲリラ仲間と日本軍の双方から逃げる最中に田中が負傷し、捕まるよりは殺せという本人の指示で合気道の弟子であるコンが実行する。最後のエンドウさんの斬首は先に示した通り、フィリップとのいわば共同作業である。使われた刀は、エンドウさん関連は長光だ。このように刀で斬首するという行為自体、衝撃的であり悲劇性を際立たせる。しかもいずれの場合も心から愛する人間を救済するためにやむなく斬るという行為である。ここで刀は敵に向けられる攻撃の道具ではなく、自らを守るために使われている。それは日本占領の残酷さと非情さをさらに強調する効果をもつ。フィリップは与えられた刀「雲」を日本軍への裏切—裏切りの裏切り—を決意した時点でエンドウさんに返却したが、それをエンドウさんはミチコに送っており、ミチコが最後のシーンでフィリップに手渡す。こうしてすべてが終わった時に名刀の大小が揃うという帰結は、刀がようやく合気道の理想である愛と調和に同一化したことを示している。

日本文化としては、俳句2首が使われていることにも注目すべきだ。いずれも芭蕉の名句で、日本人のエンドウさん絡みで登場し、彼の日本人性を強調すると同時に、戦争に対する彼の虚無感を表している。「君や蝶 我や莊子が夢心」(97) は、自分が蝶だったのか夢から覚めてもわからないという句であり、エンドウさんは常にこれを持ち歩いてたとされる。ここには彼が戦争という現実を夢かうつつかわからないとまで捉えていたことが示唆されており、平和を愛する彼が戦争に関わって感じる虚無感が示されている。さらに、「雲とへだつ友かや 雁の生き別れ」(500) はエンドウさんの辞世の句で、斬首の直前につぶやいている。もはや生きて会うことはない、という最期にふさわしい句であり、これもまたエンドウさんの教養の高さと人生観を表したものだ。これらの俳句は驚くほど適切に用いられており、作家の日本文化への深い造詣を示している。それは蝶や蛍の出現する幻想的シーンにも言えることだ。蝶は俳句ともつながるが、フィリップの父がコレクションをしており、日本軍の攻撃によって破壊された大切なコレクションの蝶の残骸をフィリップと父で海に撒くシーンは、戦争のもたらす残酷さや命のはかなさを象徴する。そして幻想的なおびただしい蛍の光はフィリップの父が母に見せた秘密の場所にあり、50年の時を経てフィリップはそこにミチコを連れて行く。そこには戦禍を越えた不変の美の存在が示されている。

このような静寂の象徴となる日本文化とは対照的に登場するのが西洋文化の象徴といえるピアノとその演奏である。占領下のペナンで日本軍将校がピアノを自宅用に接収するエピソードでは、日本軍人の気ままで残虐な接収時の行為とそれを命じる将校がピアノを選びつつ自ら弾くバッハのプレリュードの流麗なメロディーが対比的に描かれる。ここには日本軍が日本文化のみならず西洋文化も嗜むことを示しながら、勝手に傲慢な将校の振舞いによって事態の皮肉な残虐性が表されている。ピアノ接収だけならばほかの略奪行為と何ら変わらないが、ピアノをその場で将校自ら演奏しその演奏も並ではないということからは、この軍人が西洋音楽を愛する文化的人間だとわかる。それなのに同じ将校が占領地域の住民に対してはひどい暴虐を働くということからは、戦争が本来は文化を愛するような人間を分裂させ狂気に追いやることと示されている。

結語—記憶と戦争

この作品は戦争を記憶することを主眼点としているが、まず「記憶」をどうとらえているのか注目したい。記憶という言葉は全編にちりばめられているが、扉書には次の言葉が掲げられている。

I am fading away. Slowly but surely. Like the sailor who watches his home shore gradually disappear, I watch my past recede. My old life still burns within me, but more and more of it is reduced to the ashes of memory.

これはジャン＝ドミニック・ボービーの『潜水服は蝶の夢を見る』からの抜き書きで、脳溢血で倒れ全身の自由を奪われた筆者が、過去は少しずつ記憶という灰になろうとしていると述べる部分だ¹⁶。この書き手の叫びはまた、タンの作品中のフィリップの、あるいは作者自身の声だといっても良いだろう。たとえ状況は違っても、記憶は灰のようにはかなく飛び散って失われるからこそ言葉に出して残さなければならない、という認識は共通している。フィリップはまた、記憶について次のように述べる。

Memories – they are all the aged have. The young have hopes and dreams, while the old hold the remains of them in their hands and wonder what has happened to their lives. (25)

記憶は年寄りを持つ若いころの夢や希望の残滓だとされる。はかなさという点では先の言葉と同じような認識だ。フィリップの記憶はエンドウさんであり彼と共有した時なのだが、時と共にとはかなくなっていくと彼は痛感し、それゆえにミチコという他人に自分をさらけ出して話をするわけだ。ミチコは、記憶を持つことはたとえ幸せな記憶でなく悲しいものでも恵みとなる、と語る。というのも‘it shows we have lived our lives without reservation’ (103) 記憶はともかくも自分たちが生きたことを示してくれるからなのだ。こうして記憶が消えないように書き残す行為の重要性は作中で繰り返され、戦争の歴史を文学で表す意義を確認しているといえよう。

戦争の記憶と歴史に関してはすでに多くの論が出ているが、キャロル・グラックは記憶と歴史の難しい関係を指摘している。すなわち戦争の解釈は書き手の立場によって変わるために、決定的な記憶というのはいない。たとえば極端な例としてマレーシア戦を日本の仕掛けた資源戦争と捉えるか、英国からの解放をめざす戦争とするか、書き手の記憶はその政治意識などで異なってくるであろう。しかし明らかに、タンの作品はこういった戦争の位置づけを目的とするのではなく、民衆の立場から記憶を記すことをめざしている。だからこそ、先の言葉を冒頭に掲げているわけだ。ともかくも記憶に残すこと、これが重要なのである。さらに戦争の記憶の問題として、現在持ち上がっているのがグローバルな記憶の文化と呼べる記憶の国際化である¹⁷。戦争

の記憶はもはや国民の内部にとどまらず、国境を越えて共有される状況になっており、そこに謝罪の問題なども絡んでくるのが現状だ。タンのねらいがここになくとも、この発信がそのような渦に巻き込まれる可能性は否めない。ともかく記憶が歴史を作るとするならば、この作品がマレーシアの歴史を作るのに何らかの力を与えることになるだろう。

戦争の記憶が語り継がれるのは、文学をはじめとする様々な媒体を通してである。それを通じて埋もれ欠落した記憶が補われるわけであり、タンの狙いはまさにここにあるといえる。ただしその姿勢は、愛国心の鼓舞であるとか、敵国への徹底的な告発といった単純なものではない。それはここまでの詳細な分析に明らかだが、記憶に関する叙述の中にも示されている。たとえばフィリップはペナンの戦争の爪痕のある地に住み続けるのは、そこに記憶があるからだとする。若き日にエンドウさんに‘I want to remember it all.’すべてを記憶にとどめたいと情熱をこめて語ったフィリップは、すべてが終わって‘I’ve been blessed with the gift of memory.’(424) 自分には記憶という才能があるのだとして、戦争の記憶の語り部となるわけだ。彼は戦前と変わらないペナンの姿を現在に見出そうとしているが、それはペナンへそしてマラヤへの痛切な愛情であり、エンドウさんとの記憶への哀惜だといえる。

結局この作品の最も重視する戦争記憶は、マラヤ戦と日本占領における人間模様だといえる。実際に記憶を持たない世代の作者タンは、用心深く記憶の周縁を描くことで記憶の再構築を試みる。それが直接的な戦闘シーンを描くことは極力避け、人間状況を中心に描くところに表れている。その中心に位置するのがフィリップとエンドウさんであるが、敵国人であるエンドウさんを陰影ある人物に描いた上に、広範な日本に対する知識を駆使して全体像を描いている点にも、作者の意図が認められる。それは、国境を越えて戦争に巻き込まれる多様な人間模様を描き、精いっぱい生きて証を示すということにほかならない。

最後に、この作品をこれまで筆者が論じた日本植民統治を描いた他の作品と比較を試みる。1960年代以降に生まれたアジア系アメリカ文学作家の特徴には、直接的な非難や恨みを表現するのではなく、より込み入った手法を用いてテーマを設定する傾向があると指摘した¹⁸。たとえば日本侵略に関する記憶をさまざまな断片的な記憶と絡めて語るミゲル・シフーコ¹⁹の作品はそれを最もよく表しており、読者は歴史の再構築を強いられる。これに対しタンの作品はそこまで断片的ではなく、一貫した記憶が一人の語り部によってたどられている点では理解しやすい。ただし、記憶による歴史の再構築という点は共通している。歴史は客観的に述べられるのではなく、個人の体験の集合的な記憶として提示され、そこに個人と国家のアイデンティティの問題が深く関与している。ここまでは今までの作品と大きな相違はないが、大きな相違は主要人物に日本人を設定し、徹底的に人間味を付け加えたことである。ここには日本人もマレー人も同等に悩める人間であり、日本人でも他者ではないという解釈が信頼と裏切りという行為に絡めて示される。著者の日本及び日本文化への造詣の深さとともに、この視点はアジア系アメリカ文学とはいささか異なるといえる。それはこの作品がマレーシアで埋もれていた日本占領の歴史を示すとともに、これからの国家の行方を考えることまで見据えた視点を示しているからである。こうした独自の新たな視点を今後どう展開するのか、タン・トワンエンや他のアジアの作家に今後も注視し続けたい。

※ 本研究はJSPS 科研費（基盤研究（C）16K02513）の助成を受けたものである

- ¹ マレーシアという国名は独立以降に用いられた名称である。本論文では、地域はマレー半島、現在の国を指す場合にはマレーシア、独立以前にはマラヤ（英領マラヤ）を用いる。
- ² 河原崎、2017 参照。
- ³ 環太平洋研究に関しては、*Transpacific Studies: Framing an Emerging Field* のヴェト・グエン（Viet Thanh Nguyen）とジャネット・ホスキンス（Janet Hoskins）の論文を参照。
- ⁴ Dimock, Wai Chee (2007) の Introduction 参照。
- ⁵ シンガポール侵略地図 (<http://ktymtskz.my.coccan.jp/J/futuin/singa/pore0.htm>)
- ⁶ 小西誠参照。
- ⁷ 日本占領可下のマラヤに関する詳細はポール・H・クラトスカ参照。
- ⁸ 朝日新聞 2019年8月7日朝刊8面「語り継ぐ戦争(上) —南方からの声」では、インパール作戦、東南アジアの侵攻などを取り上げ、現在アジアの国々で戦争の記録や記憶の数々が出版され興味が高まっていることを論じている。その背景には経済的安定を得た現在国家のアイデンティーの確立を求める動きがあるとしている。
- ⁹ 上記記事の(中)においてこの作家が初めて紹介されている。ここでのタン・トワンエンという名前表記を本論でも採用する。また、第二作 *The Garden of Evening Mists* は現在日本人男優がキャストに入って映画化中（『夕霧花園』）で、映画公開後には作品および作家名が知られる可能性が高いが、今のところ作品の邦訳はない。
- ¹⁰ Nicole Idar によるインタビュー参照。
- ¹¹ マレー人の姓名は名字・名前の順であるため、Tan が名字となる。
- ¹² An interview with Tan Twan Eng 参照。
- ¹³ 全編にわたる 'Endo-san' という記述は他の日本人表記、たとえば Saotome や Tanaka と異なり必ず San がついているが、遠藤さんという日本語表記よりも「エンドウさん」という表記がふさわしいと思われ、この表記とする。
- ¹⁴ 作中には同性愛を示唆する行為が何か所かあり、これは禁じられた愛という表現だと作者タンはインタビューで説明している。ただ、身体的接触に関しては詳細な描写を避けており、重要ではあるが中心事項ではないという意図が示される。
- ¹⁵ 植芝盛平は実在の人物で、合気道の創始者である。
- ¹⁶ 訳本では memory を「思い出」としているが、ここは筆者による訳語を使用。
- ¹⁷ キャロル・グラックが提唱する Global Memory Culture 参照。グラックは戦争と記憶に関する最新の論をここで展開している。
- ¹⁸ 河原崎 2017 参照。
- ¹⁹ Miguel Syjuco, *Ilustrado* 参照。

引用参考文献

Book Browse, 'An interview with Tan Twan Eng'

(https://www.bookbrowse.com/author_interviews/full/index.cfm/author_number/1573/tan-twan-eng, 2019.9.11 閲覧)

Dimock, Wai Chee & Buell, Lawrence, ed., *Shades of the Planet—American Literature as World Literature*. Princeton University P., 2007.

Fujitani, T., White, Geoffrey M., & Yoneyama, Lisa., ed., *Perilous Memories—The Asia-Pacific War(s)*. Duke University Press, 2001.

- Hoskins, Janet & Nguyen, Viet Thanh, eds., *Transpacific Studies: Framing an Emerging Field*. University of Hawai'i Press, 2014.
- Hung, Yunte. *Ethnography, Translation, and Transpacific Displacement: Intertextual Travel in Twentieth-century American Literature*. Berkeley: University of California Press, 2002.
- _____, *Transpacific Imaginations: History, Literature, Counterpoetics*. Harvard University Press, 2008.
- Idar, Nicole, "An Interview with Tan Twan Eng"
(<https://www.asymptotejournal.com/interview/an-interview-with-tan-twan-eng/2019.8.14> 閲覧)
- Shigematsu, Setsu & Camacho, Keith L. ed., *Militarized Currents—Toward Decolonized Future in Asia and the Pacific*. Univ. of Minnesota P., 2010.
- Syjuco, Miguel, *Ilustrado*. Picador, 2010. (『イラストラード』中野学而訳、白水社、2011)
- Tan, Sandi, *The Black Isle*. New York: Grand Central Publishing, 2012.
- Tan Twan Eng, *The Gift of Rain*. Myrmidon Books Ltd., 2007.
- _____, *The Garden of Evening Mists*. Myrmidon Books Ltd., 2012.
- Wilson, Bernard, "Trapped Between Worlds: The Function of Memory, History and Body in the Fiction of Tan Twan Eng" *Asiatic*, Vol.12, No.2. December, 2018.
- 河原崎やす子「日本の植民統治の記憶—近年のアジア系アメリカ文学に見る傾向」『岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要』第56集、2017年
- _____, 「記憶される日本の東南アジア侵略—『ブラック島』にみる抑圧と抵抗」『多民族研究』9巻、2016年
- 神谷忠孝、木村一信編『南方徴用作家—戦争と文学』世界思想社、1996年
- グラック、キャロル『戦争の記憶 コロンビア大学特別講義 学生との対話』講談社、2019年
- クラトスカ、ポール・H『日本占領下のマラヤ 1941-1945』(今井敬子訳) 行人社、2005年
- 小西誠『シンガポール戦跡ガイド』社会批評社、2014年
- コンスタンティーノ、レナト編『日の丸が島々を席卷した日々』(水藤真樹太訳) 柘植書房新社、2015年
- 鈴木静夫、横山真佳編著『神聖国家日本とアジア—占領下の半日の原像』勁草書房、1984.
- 中野聡『東南アジア占領と日本人—帝国・日本の解体』岩波書店、2012年
- ボービー、ジャン＝ドミニック『潜水服は蝶の夢を見る』講談社、1998年